

俺、佐藤洸汰は今年高校1年生。共学になったばかりの元女子校に通っている。男子は学年全体でほとんどおらず、教室も体育館も女子の優しい声と笑顔で満ちている。そんな学校の女子バレー部に、マネージャーとして入部したのは夏休み直前の7月だった。

みんな高校3年生の先輩で、県大会を目指す強豪チームの主力だ。

キャプテンの藤原遥佳先輩は黒髪をポニーテールにまとめ、長身で優しい視線が印象的なリーダー。副キャプテンの山田あかり先輩は金髪ショートで、いつも明るい笑顔が可愛い。セッターの鈴木ゆい先輩は茶髪ボブの小柄な体で、敏捷にコートを駆け回る。レシーバーの田中りな先輩はウェーブヘアに巨乳の色っぽい雰囲気。そしてリベロの佐々木みゆ先輩は黒髪ショートボブで、小柄ながら動きが素早い。

入部して3日目の練習後、ロッカールームで藤原遥佳先輩が優しく声をかけてきた。「洸汰くん、ちょっと残ってくれる？ 大事なお話があるの。」他の4人も優しい笑顔で俺を取り囲む。夏の蒸し暑さで、5人全員のユニフォームは汗でびしょり。白い生地が肌に張り付き、ブラやショーツのラインがくっきり浮かび、部屋の中は運動直後の濃厚な汗の匂

いでいっぱいだった。

山田あかり先輩が柔らかく言った。「私たち、夏の練習で本当に汗かいて、匂いもすごくキツくなっちゃうよね。冴汰くんがマネージャーなら、優しくお手伝いしてほしいな。」

鈴木ゆい先輩が頬を赤らめて続ける。「えっと...冴汰くんの秘密、知ってるよ。汗とか、おしっことか、体液が好きなんだよね？ 私たちが優しく全部叶えてあげるから、代わりに私たちのことも優しく満たしてね。」

田中りな先輩が俺の手を優しく握って、「無理やりじゃないよ。冴汰くんが喜んでくれるなら、私たちも嬉しいの。」

佐々木みゆ先輩が小さな体を寄せて、「私もみんなと同じ気持ちだよ。

冴汰くん、可愛い後輩だから、優しくしたいな。」

俺はドキドキしながら頷いた。こうして、高1の俺と高3の5人の先輩たちの、優しくて少し秘密の夏が始まった。

夏の練習は本当に過酷だった。体育館は窓を開けても湿気がこもり、気

温は35度を超える。練習が終わると、5人の先輩たちはユニフォームが汗で重く、肌にぴったり張り付いている。ロッカールームの空気は熱気と汗の匂いでむっとする。

儀式はいつも、汗からゆっくりと始まる。

藤原遥佳先輩が最初に近づいてきて、優しく微笑んだ。「冴汰くん、今日は本当に暑かったから、汗がいっぱいよ。匂いすごくキツイけど...飲みたいよね？」彼女は白いユニフォームの裾を両手で掴み、ゆっくりと絞り始めた。じゅわっ、じゅわっと湿った音が響き、熱い汗がコップの中にポタポタと落ちていく。滴は途切れることなく続き、コップが半分以上になるまで彼女は丁寧に絞り続ける。次に胸元を絞り、汗がさらにじゅわじゅわと流れ出る。脇の下の部分を絞ると、ムレた酸っぱい匂いが強烈に立ち上り、粘り気のある汗が糸を引いて落ちた。最後に、遥佳先輩は少し恥ずかしそうに腰を突き出し、パンツ部分を絞る。「股のところは一番匂いがキツイかも...でも、冴汰くんなら嬉しいよね？」じゅわじゅわと絞られると、股間のムレた濃厚な匂いが爆発的に広がり、熱い汗がコップを溢れそうにするほど溜まった。